骨髄異形成症候群(myelodysplastic syndromes)

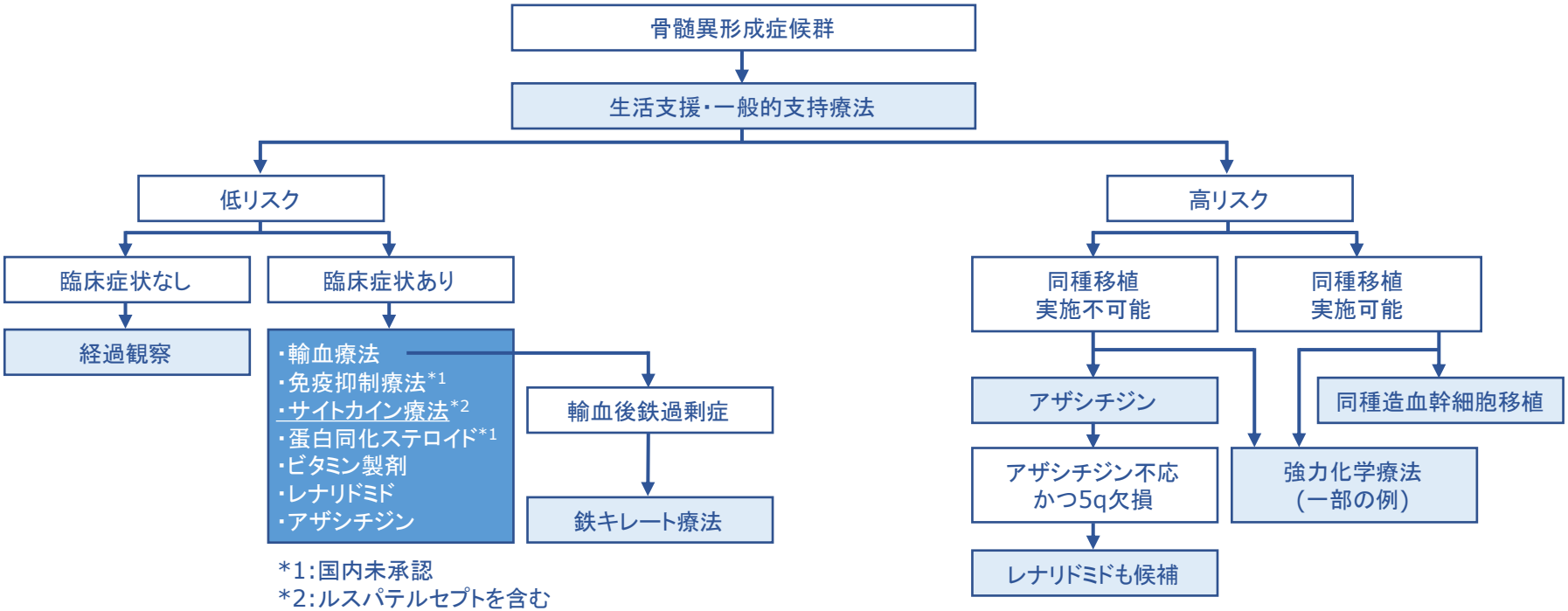
·骨髄異形成症候群は未熟な造血細胞に生じた異常が原因と考えられる骨髄系造血器腫瘍の一つであり、単一あるいは複数系統の血球減少、血球の形態学的異形成、骨髄における無効造血、急性白血病転化のリスクを特徴とした、複数の疾患からなる症候群の集まりと捉えられる(造血器腫瘍診療ガイドライン2023年版)。

·骨髄異形成症候群に対しては適切な間隔での医学的観察・受診、患者の社会的生活への支援など一般的な支持療法が重要となり、低リスク†で無症状の場合は経過観察を続け、低リスクで血球減少による症状がある例や高リスク‡例に対して治療が実施される(造血器腫瘍診療ガイドライン2023年版)(図1)。

·低リスクで血球減少による症状がある例においては血球減少に対する対応(貧血に対する赤血球輸血、血小板減少時の血小板輸血、感染症対策等)に加えて、その改善が治療の第一目標となる(造血器腫瘍診療ガイドライン2023年版)。

·ルスパテルセプト(レブロジル)は骨髄異形成症候群に伴う貧血に適用を有する薬剤であり、高リスク例に対する有効性及び安全性は確立していないとされていることから、低リスクと判断された患者に用いられる。

図1: 治療アルゴリズム(造血器腫瘍診療ガイドライン2023年版より作成)



*1:国内未承認
*2:ルスパテルセプトを含む

†: IPSS-R(Revised International prognostic scoring system)によるリスク分類のVery low、Low、またはIntermediate
‡: IPSS-RによるリスクHighまたはVery High